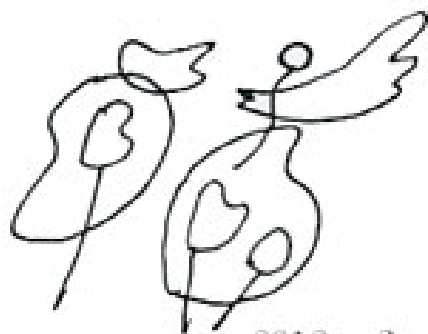




2012・2

**SORA** 41号

## 漁神

柴田 佐知子

月光の鏡に月の柱あり

前のめりして走りだす七五三

夜は化けてゐるかもしれぬ竈猫

吹きさらしなる漁神の鏡餅

読始すぐ骨肉の争ひに

拝したる神は石ころ虎落笛

潮風に荒れし飾りを火に投ず

鶏小屋の廂短し霜の花

三食に薬が付いて父の冬

波音が海鳴りとなり白障子

銃口の鴨がこちらへ向き変ふる

みな丸き雀の頭日脚伸ぶ

父老「俳句」二月号よりいて湯ぶねの柚子を訝しむ

産神や担ぐほどなる鏡餅

龍神の珠奪ひたる夢始

冬帽子正しくかむり祖父来る

鶴のこゑ山裾はまだ闇浸し

でたらめの歌うたひをる耳袋

獣らの牙磨かむと寒波来る

白息の高さ違へて会ひにけり

きつちりと和紙乾きたり冬の鴈

傷負はぬほどに愛して葱刻む

初夢 高倉和子

太箸や日当たりの良き山の色

初夢を少し繕ひ話しけり

左義長の青空暗くしてゐたり

はじめから汚れてゐたる雪達磨

父の来て母の多弁や冬林檎

蜜柑むく話だんだん遡る

母ひとり残して帰る寒さかな

枯れきつて青ざめてゆく山河かな

肝坐る 中田みなみ

ポインセチア積みて出荷や勝利めく

クリスマス雀に麴麴の大き過ぎ

生月島を偲びて

ベランダに鳥賊干し島のクリスマス

蒲鉾の大釜休みクリスマス

ネクタイの漁夫らの聖歌揃ひけり

想ひ出の絡むセーターほどこきけり

大旦太陽の出で雀来て

大皿の割れて元旦胆坐る

漆 黒

荒井千佐代

短日の灯ともし葬儀弥撒を弾く  
三方の山すこやかに冬至かな  
降誕祭迎ふ身ほとり死者ばかり  
死者生者へだて屏風の傾ぎ松  
ひとり居の闇へ闇へと手糸玉  
沖よりの風に雨意あり兎罌  
大年の暮るる長崎山囲ひ  
漆黒の闇は海なり除夜詣

冬 帝

服部早苗

野の花の日ごと色濃く冬支度  
じやんけんのちよきが苦手よ一葉忌  
聖護院大根引きし穴と知る  
偶数のどこもとがらず小春空  
トルコ石嵌む冬帝の薬指  
駅ホーム北へと伸びる空つ風  
松過ぎの地下へとおりる小劇場  
言ひつけを守る手毬の子の愛し

秋月

柴田志津子

八方に冬の水鳴る城下町

しぐるるや裾よりいたむ城の門

かち烏鳴いて冬木の御成道

門前に緑高掲げ十二月

冬草やこんなところに絵踏橋

冬ざれの流れに小さき水ぐるま

町内に護符くばらるる年の暮

短足の犬が触れゆく霜の花

煤払

だいじみどり

初み空かぞへきれざる屋根の鴿

耕や出でくる石を抛りつゝ

木守柿ななつ残れるたたずまひ

数へ日の軒端の桶をひきよする

きりもなき故郷の話年守る

靴紐を結ぶ手間隙はつ戎

煤払たれもゐなくて捗れり

ふたおやのにちにち遠し春近し

千葉 原 友子

疔・广・厂萩枯るる

去年よりも底が高し柿吊す

いま檻を出て来たやうな裘

寒垢離の水音月を突き放す

枯蓮の影枯蓮を見離さず

福岡 矢野百合子

寒釣の親子互に関はらず

着ぶくれて見上げて我が子諭しをり

生き生きと死のこと話す日向ぼこ

まだ十指動いて勤労感謝の日

信号も尾灯も真つ赤年詰まる

糸田 宮井知英

得心の告知聞きをり惜命忌

凍蝶や己信じて神任せ

星冴ゆる峽は一戸を残すのみ

切株の泡立つ杣の焚火かな

闘病や白鳥になる夢を見て

福岡 あさなが捷

うたた寝の母は冬日に透けてぬし

竹林に猪罌の錆びてをり

かるがると死後の話を暖かし

夕波や少し欠けたるさくら貝

赤々と祠に椿飛び込みし

長崎 鳳 蛭華

冬の虫嵩なき声となりにけり  
ポケツトに滑りこむかに冬没日  
てきばきと紋付鳥の枝移り  
皇帝ダリア思はぬ丈を憂ひをり  
棉が吸ひウールが弾く時雨かな

吉井 高倉恵美子

頼りなき体となりて去年今年  
年祝ぐ思はぬ人の加はりぬ  
冬菜採る手の固まつてきたりけり  
氏神は垣根越しなり石路の花  
病院に戻りてゐたる三日かな

熊本 松田明子

宮相撲小兵に軍配上りけり  
鹿垣の内に人住み開拓地  
一村を包みて余る山の霧  
海山のあはひに黒酢造りけり  
山下りし杣の片手間棕櫚を剥ぐ

須恵 苑 実耶

夕星や逢瀬のごとく初芝居  
連風の先つぽ雲の中にあり  
十分と母言ひにけり冬の月  
どんど火の崩れ火柱昇天す  
初夢や鬼の形相迫りくる

粕屋 秋 千晴

伸びるだけ首を前へと鶴渡る  
山茶花を散らして猫の垣根越ゆ  
輪飾を枯れし井戸にも掛けにけり  
制服の微動だにせぬ出初式  
真向ひの大火事に窓震へたり

大阪 青木 朋子

極月の街の大河を渡りけり  
マスクして考へること止めし顔  
半生を聞きぬ鯛焼できるまで  
影にまづ追ひ越されたり冬の坂  
綿虫の何か伝へに来し夕べ

福岡 山内 碧

寒風を突つ切つて行く久女展  
田も畑も屋敷も冬日差すばかり  
輪飾に留守をたのんできたりけり  
帯締めを体の芯に初句会  
難しき名がつく赤子日脚伸ぶ

福岡 吉村 摂護

新雪や手すり伝ひに妻の部屋  
リハビリの足を廻して冬至風呂  
五歩六歩畳を歩く大晦日  
杖ついて片手拝みの初詣  
杖捨てて一陽来復歩き出す

山梨 野畑さゆり

富士を愛で日向ぼっこへ加はれる  
ふるさとの訛の中へ着ぶくれて  
あの頃とは声をおとして炉を囲む  
またひとつ父の忌重ね聖夜かな  
煤払ひ渡しの跡の観音も

福岡 亀井紀子

糸のこ草墓石の底にクルスあり  
雪吊や松にしたがふ男たち  
ふるさとに急礫多し冬紅葉  
水鳥の遊びきつたるお濠かな  
一頁全て目標初日記

粕屋 吉田 葎

抽象の男具象の女秋深し  
真つ向に翼を受けるハハキトク  
りりんんと骨壺応ふ梅の花  
おほかたは無沙汰を侘びる賀状かな  
かき混ぜる糠床の渦春隣

福岡 栗原京子

白壁に白猫消えし冬日向  
冬雲に届く藩主の手植糸杉  
翡翠の青は後に捧げけり  
古代いと栄えし国の刈田風  
冬帝や支那服の黄は極まりて

行橋 安武 晨子

近くの木遠くの木にも懸大根

青空の孤独を癒す木守柿

折ればすぐ折るるもろさよ残り菊

歳月は句碑にもありし枯るる中

新暦ほのと幸せくるやうな

福岡 田代 貞枝

子等が来て家ぬくぬくと年の夜

午夜に入りまだ明明と年惜しむ

仕舞湯に身を沈めては除夜を過ぐ

入院の夫の座空けて雑煮膳

他愛なきことも一族初笑ひ

糸島 小林 朱夏

退院の赤子を抱く小春かな

児の頭より大きな乳房柚子香る

書初や赤子の手形足形も

凧や夜泣きをあやす子守唄

乳匂ふ春著の中の親子かな

大阪 田岡 千章

朝鵬や豆腐屋は戸を全開に

鷺掴みしたる榎櫃が香を放つ

盃に表面張力秋深む

達者かと一筆伊予の蜜柑着く

書込みの辞書は御下がり文化の日